禅文化歴史博物館セミナー講演録

図書館・書物・読書―その源流をたどる―

小黒　浩司

はじめに

こんにちは。小黒と言います。今日はよろしくお願いします。今回の講演のタイトルは「図書館・書物・読書」ですが、今回の講演の会場の建物は元は図書館でしたので、まずは駒澤大学の図書館の歴史について簡単にご紹介させていただきます。

駒澤大は1882（明治15）年現在の港区六本木に「曹洞宗大学林専門本校」（曹洞宗の僧侶育成機関）として開校しましたが、後に近代的な大学を目指していきます。図書館でも、1904年に既に専門の図書館員を配置するようになりました（翌1905年に校名を「曹洞宗大学」と改称）。現在の港区六本木から駒沢に移ってきたのが1913年です。ところがこちらに移ってから10年ほどの1923年に関東大震災があって、書庫が壊れてしまいまして、急遽新しく建て直すことになりました。1925年に大学令による大学として認可され、「駒澤大学」と名前を変えて、いよいよ寺院の子弟だけでなく、一般学生の勉学の場として、広く門戸を開いた大学として動き始めようという時に、大学の心臓部である図書館が十分に機能しなくなってしまった。そこで1925年に書庫が先にできて、この建物自身（２代目図書館）は少し遅れて（その辺の事情についてはまた後でお話しますが）1928年に竣工しました。1973年に前の図書館（３代目図書館）ができてこの建物は図書館としての役割を終え、耕雲館となりました。先週（2022年10月17日）新しい図書館（４代目図書館）が開館しまして、また新しい図書館の歴史が始まりましたが、ちょうど今年が開学（校）140年に当たり、やはり図書館の役割が重視されているのではないのかな、と思いました。

さらに、駒澤大の元々の、曹洞宗の僧侶養成機関にまで遡ると、その前身は現在の文京区の駒込にある吉祥寺というお寺の境内に置かれた旃檀林（せんだんりん）です。こちらがその山門ですが、扁額に「旃檀林」という文字が書かれているのが分かると思います（写真１）。図書館ということですと、境内に入りますと、江戸時代に建立された経蔵（お経などが入っている書庫のこと、詳しくは後程）が、まだ残っています（写真２）。東京23区だと、古い経蔵は非常に数が少ないですね。

写真１　吉祥寺山門

写真２　吉祥寺経蔵

江戸の町ではよく火事がおこりました。近代になっても関東大震災、そして、東京大空襲などがありまして、僕が知っている範囲ですと吉祥寺の経蔵（1804年）、芝増上寺の経蔵（1681年・1802年移転）、池上本門寺の経蔵（1784年）、この三つが古い経蔵だと思います。ですから、吉祥寺の経蔵も文化財的な価値があると言えます。

1. 記録の歴史

では改めて、図書館の源流を辿ることになりますが、図書館というものが生まれるにはその中に本がなければいけませんので、本の歴史から始めたいと思います。本は様々な情報が記録されていますが、仏教では、最初は記録はしていませんでした。専ら釈迦の教えを口伝えでやっていたんだけども、どうも伝言ゲームをやると中身が違ってくるというのはよくあることでして、Aというお弟子さんの言うこととBというお弟子さんの言うことがちょっと違ってくる、なんていうことも起こったんでしょう。これではまずいから、ちゃんとお釈迦様の教えを記録をしようと、どこかの時点で弟子の人たちが考えた、これを結集（けっじゅう）というそうです。

1.1 石に刻む

じゃあどこに何に記録をするかですが、有難い教えをちゃんと後世に残すならば、石ならば相当丈夫で長持ちするので、石に刻むということをしました。石に刻む、例えばこんなものがありますね（山形県南陽市東正寺永仁二年磨崖板碑）。こちらは板碑（いたび・ばんび）ですが、1294（永仁２）年というのは鎌倉時代の早い時期です。今でもご覧の通り若干文字が見づらいですけど、梵字が刻まれているのが分かると思います。こういった中世の板碑は、この関東地方で珍しいものではなく、あちらこちらにまだ残っております。保存性がいいなと感じますが、それにしてもお釈迦様の教えを広く伝えるにはあまり適していないですね。もし現在、紙がなく、石の時代が続いていたなら今日僕がこんな内容で話すということを何枚かの紙にまとめてありますが、これが石だと結構大変なことになるのがお分かりになると思います。そこでまた人は考えるわけです。

1.2 バイラーン

ではどうしたものか、とお弟子さんたちは考えたんでしょうね。そうすると、身近なところだとヤシの木が生えている。非常に入手しやすいので、ヤシの葉っぱに記録をしたらどうだ、と誰かが思いついた。バイラーン（Bai Lan）と言います。ウチワヤシという葉っぱの大きなヤシの木があり、その葉を乾燥させて切りそろえ、穴をあけてぎゅっと糸で綴じたものです。

ちょっとこちらの国立民族学博物館所蔵の中西コレクションの画像を見ていただきたいんですけど、ここに文字が書かれていますね[i]。また、穴を開けて綴じていたことが分かると思うんですけど。後でこのことは触れますが、南方から穴をあけて綴じるという文化が、中国や日本に伝わってきたのかもしれません。

それからこちらのコレクションは他にも色々ものがありますけれども、元は言語の研究のために集めたものらしいです。例えば、竹の筒の表面に文字が書かれているもの[ii]、それから絵入りのもの[iii]など、木の皮や葉に記録をすることが、南アジア･東南アジアの地域で行われていたことが分かります。でも高温多湿の南アジア･東南アジアでは、ヤシの葉っぱなどは腐りやすく、保存性がよくない。そして東アジアの方ではたくさん生えていないので、また何か工夫がないかと、人は考えるのです。

1.3 パピルス

このコレクションには、エチオピアの聖書もあります[iv]。素材は獣皮のように思われます。エチオピアのお隣エジプトや古代ローマなど地中海沿岸の地域では、紀元前3500 ～ 3000年頃からパピルス（papyrus）に記録をしていました。パピルスとは英語のペーパー（paper）の語源になりますが、紙とは全く違うものです。繊維質の強い丈夫なパピルスという水草の茎の部分を薄くスライスして縦横縦横とつなぎ合わせています。紙に比べればあまり丈夫ではありませんが、これが幅広く地中海沿岸の地域で使われていたようです。どんなものかちょっと国立国会図書館の電子展示の画像で[v]。これは近年エジプトで売っている観光土産ですが、縦横の繊維がはっきりと見えると思います。そして、長いも

のになったらご覧のようにくるくると巻いておきます。このパピルスはエジプトなどでは紀元後1000年くらいまで使われていたようですが、その後、紙の時代になります。

1.4 羊皮紙

西洋の国々の場合は、パーチメント（Parchment、羊皮紙）という、羊や山羊の革をなめして作るものなんですけど、これに記録するようになっていきました。その訳は、丈夫だったからです。ただ、非常にかさばって重く、置いておくところを作らなければならないため、もしかするとそこから西洋風の図書館が生まれたのかもしれません。羊皮紙は15世紀くらいまで使われていたのですが、その後は紙の時代になります。なぜ紙に切り替わったのかを考えると、保存性という点もありますが、羊皮紙は非常に高価なんです。聖書を１冊作るために、ヤギの命が300頭ほど必要なようです。ですから、あまり宜しくないですね。しかしながら丈夫であること、どのくらい丈夫かというと、穴をあけて糸でぎゅっと綴じることができる。そこで現在の本の原型のようなものが生まれたのではなかろうかと言われております。

まずは今のトルコあたりでこの技術が生まれて、シルクロードに逆に伝来して穴あけて綴じるというのがアジアに伝来したのではないかする説もありますが、特に仏教を信仰している国々からすると、四つ足の革を使うことに対して抵抗があったんじゃないかと思います。むしろ、先ほどご紹介したバイラーンを使ったのではないかと思いますが、この辺ははっきりしないところです。

ちなみに、最上等の羊皮紙が、ヴェラム（Vellum）という子牛の革を使ったものです。大英図書館（BL）所蔵の最古のコーラン（クルアーン）Or.2165は、ヴェラムを使って８世紀に作られたものです[vi]。

1.5 紙

一方、中国など東洋では古くから紙を使っていました。かつては、中国・後漢時代の105年に蔡倫という人が紙を発明したとされていましたが、近年になって紀元前の遺跡を発掘したところ、紙が出てきまして、どうやらこの蔡倫は製紙技術を確立した、そして記録に使えるような高品質の紙を生み出した人物であると言われています。

紙が使われる以前は中国や日本では、木や竹に記録していました。しかしこの紙というものが非常に優れたもので、取って代わられたのです。どんな点が優れていたのか、まず、軽くて丈夫です。折ってもまたすぐに元に戻り、切ったり穴をあけて綴じることもできます。それから、もともとの紙はぼろきれで作っていたので非常に原価も安いです。日本の場合は森林資源が豊富な国ですので、比較的安く紙を作ることができます。今でも、我々は紙にメモを書いたり、印刷された本を読んだりと、使い続けています。

もちろん、欠点もあります。まず耐久性がない。火とか水にはからきし弱い。ですからしっかりと保存をしておかないといけない、ということになりますね。次に製紙はあまりに高度な技術ですから、最初は中国の専売特許で他の国々での使用が遅れました。もう１つ、滲みやすいという欠点があります。これは和紙に墨で書いた時、墨をつけすぎると、びしゃっとなった状態を思い出してもらえればいいと思います。墨の成分が繊維と繊維の間に入り込んできてしまうのですね。これは、記録がちゃんと残るということで、良い点でもあるのですが。

最近の紙は滲まないですね。これは西洋風の紙でして、滲み止め加工をやっています。その代わり、滲み止めのために硫酸アルミニウムという薬品を使っているものですから、あまり長持ちしない紙になってしまいました。中国生まれで、恐らくは朝鮮半島経由で日本に入って来て、日本で更に技術が高度化した、所謂和紙と呼ばれるものは、天然素材100%、弱アルカリ性なので非常に長持ちで、正倉院に今から約1300年前の紙が残っています[vii]。残念ながら僕も手に取って見たことはないんですけど、聞くところによると、本当に新品同様だそうです。もちろん、現代の正倉院は空調完備ですが、今から1000年前はエアコンがなかったわけです。でも、ある程度通気性をよくしておけば、弱アルカリ性の紙は1000年、2000年の月日は持つ耐久性のある非常に優れた品質です。つまり、記録には最適なんです。

2. 図書の歴史

2.1 巻子

それでは次に、紙をまとめて冊子にした、本の歴史です。ちょっとしたメモでしたらヤシの葉っぱでもいい、あるい

は、木や竹の切れ端でもいいのですが、経典、歴史、哲学など情報量が多いものの記録・保存となると、やはり問題が生じます。仏教だと、お釈迦様の有難い教えはたくさんあり、そうしたものを記録する、残す、ということで、様々な工夫がなされます。例えば非常に長文な記録だと、どうしたら良いか。最初のうちは、紙を貼って長くしてそれをくるくると巻いた巻子（かんす・けんす）だったようですね。くるくると巻くというのは情報を小さくまとめるということで、合理的な考え方です。口頭では分かりづらいと思いますので巻子本とはどういうものか、国立国会図書館の電子展示の「古典籍のつくり」のページに図が載っています[viii]。真ん中の棒、巻軸といいますが、そこにくるくると巻いています。これを紐解いて順に読んでいくんですが、この巻くということが、いろんな宗教を越えて比較的最近まで残っていた例が、こちらです。これはユダヤ教のトーラーというもので[ix]、くるくると羊皮紙が巻いてあります。

しかし巻くと途中を見たいとか、最後の方を見たい時に不便なので、巻かずに折る、そして、穴を開けて綴じると、変化していきます。

2.2 折本

まず、途中を見たいとか、最後の方を見たい際に不便なので、巻かずに折るようになりました。これが折本です。どんな折本があるのかですが、お経に多いんですね。つまり、お坊さんは片手で合掌して片手で木魚を叩く、その傍らお経を時々見なければならない。しかし、折本であれば、一か所開いたところで固定できるため、非常に便利です。例えば曹洞宗の出版物販売サイトを見ると、今でも、折本のお経が結構作られていることが分かります[x]。

2.3 冊子

羊皮紙や紙を複数枚重ね、一方の端を綴じたものが冊子です。前のほうでお話したように、この綴じるということは、羊皮紙を用いて３世紀末～５世紀初頭に誕生したとみられます。コーデックス（codex）です。それが、クルド商人などによって東洋にも伝来したのではないか、とする考え方があります。しかし、もしかしたらそうではなく、バイラーンなどの木の葉に穴をあけて綴じるというのが南アジア・東南アジアから東アジアに伝来したのかもしれません。その辺は、よくわからないところです。

西洋において比較的古い時代に冊子を開いている様子を描いた絵として、イタリア・ラウレンツィアーナ図書館（Biblioteca Mediceo-laurenziana）所蔵のアミアティヌス写本（Codex Amiatinus）があります[xi]。７～８世紀のものです。まずこちらの絵、膝の上に本を置いて書いている（８コマ目）。聖書などを書き写すということです。奥の方に書架、本棚がありますが、西洋の場合、まず修道院の修行僧は聖書などを書き写す、ということで修行をするわけです。そういう過程で貴重な本を常に置いておかなければならない、そしてその本を写さなければならないので、西洋風の図書館が生まれていったと思われます。

他方、東洋の場合は、比較的早い時期から紙を使っていました。そうすると、小型、軽量ですので、わざわざ図書館のようなものを建てなくても、そこら辺に置いておくことができたので、また違った考え方が生まれたように思います。穴をあけて綴じるということについて、恐らくは魏晋南北朝、中国に仏教が入ってきて盛んになっていた時期ですが、中国で修行した僧が他に何かお経はないかとヒマラヤ山脈を越えてインドを目指しましたが、大変な旅だった模様です。そこで、帰りはどうやら海伝いで東南アジアを通ってきたようです。そういう過程で先ほど述べたように、バイラーンが徐々にこの南の方から入ってきた可能性が高いのではないかと、思います。

法顕（ほっけん）という中国六朝時代・東晋の僧侶が399年長安を出発、シルクロードを経由してインドに渡り、409年師子国（スリランカ）へ至るという記録が残っています（慧皎撰『高僧伝』巻３）。413年海路で帰国しますが、摩訶陀（マガダ）という国のアショーカ王の南天王寺という寺で、『魔訶僧祇律』というお経を手に入れて、さらに梵語を３年かけて学んで、書き写した。その時は多分、ヤシの葉っぱに書いてあったのではないでしょうか。それを、仏像なんかと共に師子国から恐らく海路で、ぐるっと東南アジアの方を回って中国へ持っていったのです。東南アジアでは、仏教を信仰している国が多かったでしょうから、比較的安全性が高かったと思うんですが、商人の船に便乗していたのです。商人もまた、僧侶を船に載せることで海路の安全を確保する、そういう部分もあったのかもしれません。同じ宗教同士であれば、修行した僧侶に対して、あまり酷いことはしないということもあったかもしれません。とにかく、南ルートで帰っ

たんですね。で、その中に、もしかしてその穴をあけて綴じるというものも積まれていて、中国へ、そして日本へ、と渡来したのかもしれません。

穴をあけて綴じるというものが日本にいつ伝来したのかですけど、空海が粘葉装（でっちょうそう）の『三十帖冊子』を持ち帰ったと言われています。読書の仕方でいきますと、お経ならば前から順番に読んでいきますが、辞書とか事典の場合は、途中だけ見るということをします。そうすると巻子本よりも折本や、あるいは穴を開けて綴じる冊子体の方が利用しやすいので、辞書類を使うようになり、冊子が使われ始めたのではないかと思います。

一方で宗教の世界では非常に伝統を重んじるわけですから、もともと巻物・巻子であればその姿を、大切にしようとしたと思うんですけれども、利用のしやすさから、徐々に冊子に切り替わっていったんではないかと見られます。それがいつくらいに定着をしたのかですが、そこにもう１つの要素がありました。それは、つまり、印刷が盛んになるということです。印刷とは大量複製技術ですので、いちいち糊をつけてくるくる巻いたり折ったりしたりしては手間がかかるので、いっそのこと職人さんが分業体制でぽんぽんと穴をあけてぎゅっと綴じた方が早くたくさん作れます。しかも比較的丈夫です。中国では、宋の時代、つまり禅宗が日本に入ってくる時代には、既に冊子が一般化したのではないかと思います。これについては後述します。

２.４ 電子版

印刷の前に１つおまけです。今は電子の時代ですね。今や、お経をスマホで見ることができるようになりました。どのように読むかいうと、画面を下にスクロール（scroll）します。１周回って再び「巻く（scroll）読書」の時代が訪れたようです。もしよろしければ、まだダウンロードされていない方は、どうぞ後でダウンロードしてみてください[xii]。無料です。

３.印刷の歴史

ちょっと余計なことを言いましたが、次に印刷です。印刷もやはり中国で生まれました。活字印刷はグーテンベルクが発明した、ということがよく言われますけども、活字印刷は最初に中国、次いで朝鮮半島です。木版印刷ならばそれよりもずっと早い中国の隋唐の時代に起こったものです。やはり、仏教が盛んになってきて、お経をいちいち書き写していたのでは間に合わない、あるいは書き写すうちに誤りが生じてしまった。もっとたくさんの人に仏様の有難い教えを間違いなく広めるには印刷だ、ということで、まずお経から印刷が行われるようになったと思われます。

３.１ 百万塔陀羅尼

その中で、いつ作られたということがある程度分かっているという点では、今のところ世界最古が日本の「百万塔陀羅尼」です。奈良時代の女帝、称徳天皇の命により作られ、770年に完成したことが分かっています。こちら、このたびの貴重図書展に出品されました（「開校140周年特別公開「駒澤大学貴重図書」－駒澤大学図書館のあゆみ－（2022.５.９～12.22）」第１期）。ご覧の通り、駒澤大学の電子貴重書庫に入っています[xiii]。どういうものかといいますと、塔の中に穴が開いていて刳り抜かれて、お経が中に入っています。お世辞にも、印刷技術として優れたものではなく、スタンプのようなもので、ぺったんぺったんではないか、といわれています。作り方がよく分からないんですが、貴重なものです。約100万作製し、相当部分近代に至るまで残っていまして、廃仏毀釈で法隆寺が大変なときに、一部市場に出回ることになりました。多分その中の１点を駒澤大も入手したのではないかと思います。

３.２ 世界最古の年紀のある木版印刷書

それから、何年に印刷されたということがはっきりと記されているのは、現在大英図書館で所蔵している『金剛般若波羅蜜経』で、西暦868年です[xiv]。同館のウェブサイトのオンラインギャラリー “Printing landmarks”を見ますと、百万塔陀羅尼も載っていますが、やはり『金剛般若波羅蜜経』が印刷技術としても非常に優れています。中国の唐の時代に相当印刷技術が向上していたことが分かります。

3.3 大蔵経

次に本格的・大規模な仏典の印刷事業となると、ちょっと時代が下り、といっても宋の時代ですけど、大蔵経があります。972年に開版が命じられ､977年に完成しました。当時集めることが可能なお経は恐らく全部集めて印刷しました。それを今度は日本に請来しようということになりました。平安末期ぐらいから中国がだいぶ落ち着き、日宋貿易が盛んになる過程で、日本の僧侶なども貿易の船に便乗して中国に渡り、禅宗を知り、日本に伝えた。また、この大蔵経を請来しました。

しかしながら、誰でも所有できるものではなく、宋の皇帝の許しがないと持ち帰ることができない、非常に貴重なものでした。ですから日本でもそれをちゃんと保存しなければいけないので､その置き場所を考える。これが経蔵ですが、それは次にお話します。その前に大蔵経ですが、日本における最初の印刷版の大蔵経は江戸時代の1678年に完成しました（黄檗版大蔵経、鉄眼版）。

こちらは、駒澤大所蔵の明版の大蔵経です[xv]。ご覧の通り、これは明らかに冊子ですね。この明版の『万暦版大蔵経』は、中国でも最初の冊子の大蔵経と見られています。それが日本に伝来した。中国ではお経を印刷し、冊子にしている。ならば日本でも、同様に冊子の印刷を、となり、日本版の大蔵経も冊子になっていったと思います。

4.書庫・経蔵の歴史

中国や朝鮮から輸入した大蔵経にしても、日本版の大蔵経にしても、仏様の有難い教えが記されたものですから、ちゃんと置いておくところを用意しないといけない。ということで、経蔵が生まれました。経蔵とはお寺で経典類を納めている建物です。お経だけではなくて、他の本などを収めているのが書庫ですから、図書館とはどんなところか？本が大切に保存されている場所だ、ということでいけば、経蔵は図書館の原形という言い方もできると思います。

4.1 古代　校倉造の経蔵

経蔵が日本でいつ最初に作られたのかですが、現存の範囲ですと、天平時代の唐招提寺（奈良市）の経蔵が一番古いです[xvi]。ただし、これはもともとお経を納めるために作ったわけではなくて、穀物蔵として建てられたものを転用したようです。それにしてもしばらくの間、こういった貴重な物を納めるためには、校倉造りが用いられました。その最大級のものが正倉院です。

図書館建築の歴史の上でも、この唐招提寺の経蔵は貴重なもののはずです。しかしながら、先ほども話した通り、校倉造りというのは、もともとお寺の建物ではなかったのです。恐らくは朝鮮半島あたりで湿気を避けるために生まれた造り方だと思います。湿気を避けるという点では良いのですが、校倉造りは今風に言うとログハウスみたいなものですから、強い揺れには弱く、日本のような地震が多い国には適していません。ですから、その後校倉造りは仏教建築の世界ではあまり用いられていません。

横道にそれる形になるんですが、唐招提寺の経蔵の裏に小さな池があります。滄海池という名前がついていますが、これは鑑真が何回も海を渡って来ようと思って、ついには失明をして、それでも日本に来ようとした、という歴史を踏まえて造られたものかもしれませんが、やはり紙でできた経典にとって大敵は火である、その火から守るための池なのかもしれないですね。なぜなら、いくつかの古い経蔵の周囲には、こうした池・堀があるんです。特に京都の東寺（教王護国寺）には立派な堀があります。

防火対策は重要ですが、そういった堀を造るということは行われなくなります。つまり、もう一つの本の大敵は水なんですけれども、大雨の時を考えると、近くにこうした堀を造ると、下手をしたら本が水を被ってしまうかもしれない、そうでなくても、湿気が強くなるんじゃないか、と思います。それで、あまりこうした造りは無くなったように思います。

古い経蔵はあまり残っていないものですから、必ずしもはっきりとは言えないんですけれども、古い経蔵が残っていない理由としては、やはり火事ですね。京都って意外に応仁の乱より古いものが残っていないんです。それから、経蔵のような建物を建ててわざわざ保存するほどたくさんのお経もなかったのかもしれません。

現存するということですと、だいぶ新しくなりまして、鎌倉時代の1288年建立になりますが、こちらは奈良市の海竜

王寺の経蔵です[xvii]。ご覧のとおり、校倉造りではなく普通の木造です。ただ高床式になっていますので、湿気を避けようと考えていたのかもしれません。この鎌倉時代あたりから古い経蔵が残っています。先ほど述べたように、お経があまりなかったため、そもそも、経蔵はあまり作られなかったのかもしれませんね。ところが、平安の末から鎌倉時代に中国から禅宗が入ってきて、国内でも新しい宗派が生まれる。そうすると、やはりもう少しきちんとお釈迦様の教えを研究しようじゃないかという気運が高まり、お経に対する需要が高まっていきました。一方で、中国で印刷技術が高度化して、大蔵経なんかも出版されるようになってくる。

こうして鎌倉から室町時代くらいから、経蔵が建ち始めたのかもしれません。そうした中で比較的古いものとして知られているのが、大津市の三井寺（園城寺）の一切経蔵（室町時代）です[xviii]。もともとは山口県のお寺にあったものを滋賀県に移築をしたようです。三井寺の経蔵の内部は、輪蔵という回転式の書架です。こうしたものも、鎌倉から室町にかけて禅宗が日本に入ってきて、禅の教えを学ぶために日本の僧侶が中国に行って、大型の経蔵の内部に輪蔵があるんだということを見聞して、日本でも、となっていったと思われます。

4.2 鎌倉・室町時代の経蔵

日本から中国に渡った僧の１人が栄西（えいさい）ですけど、次のようなことを言っています。

宋朝奇特、有二十箇。（中略）十六、経蔵僧堂荘厳如浄土。

浄土のような経蔵とはどんなものであったかについてはまた後程想像したいと思います。こうした見聞が基になって、貴重なお経を納めるために日本にも経蔵を建て、その経蔵の中のお経を使って学習しよう、あるいは、回転式の輪蔵を設けて信者獲得にならないか、ということになるのですが、実際には、この経蔵、輪蔵が広く造られるようになったのは江戸時代になってからです。

4.3 江戸時代の経蔵

江戸時代になってから、というのは、戦国時代は戦乱で、お寺どころではない。しかし江戸時代は平和な時代になります。幕府も上手く仏教を利用して統治体制を作っていきます。そういう中で、各寺あまり華美には走らない程度に立派な伽藍を造っていくことができるようになり、その建物の１つとして経蔵もありました。経蔵はお経が納めてある大切な建物であるため、他の建物よりも丈夫で、内部の本も守られるようなものである必要がありました。

他方、江戸時代になってもう戦争がないので、築城技術が不要になってしまった。幕府も、1615年に一国一城令を出しお城は作るなということになりました。そうすると職人さん達は仕事がなくなり、大変に困るわけです。そこで、お城を作る技術を、例えば商人が商品を納めるための土蔵に、というように、他に転用していくなかで、お経を納めるには土蔵がいいんではないか、となっていったと思われます。

土蔵は、壁に土を塗り籠めて分厚い土壁とします。戦国時代、鉄砲や大砲も使われ、その玉が当たっても壊れないくらいの丈夫さ、その丈夫さを確保するために分厚い壁となります。その分厚い壁によって、外の強い日差しなんかをさえぎることができ、案外夏場でもひんやりしています。雨が降っても、そう簡単に雨はしみこまない。日本の場合地震が心配ですけれども、藁を練りこんだり、木や竹の補強材を入れるとかなり丈夫になるので、地震にも強いのです。ということで、お城のような土蔵造りの経蔵が現れます。こちらは名古屋の建中寺というお寺の経蔵ですが（1828年）[xix]、まるでお城のような白漆喰総塗籠（しろしっくいそうぬりごめ）です。尾張徳川家の菩提寺ですので、それなりの規模の経蔵です。ちなみに内部は輪蔵です。

また江戸時代になると、大蔵経も日本で印刷されるようになります。じゃあ、それをちゃんと納めましょうということで、先に23区内には三つしか古い経蔵はない、と申しましたが、全国的に見れば100、200はあると思います。昔であれば本山級の寺格の高い寺にしかなかったような経蔵を、ちょっとしたお寺でも造ることが出来るようになった、平和な時代が訪れるんです。日本の場合、大蔵経は中国より小ぶりなものが多いので、その分建物としても小ぶりですみます。それにしてもある程度檀家さんにお金がないとこういった建物は建てることができなかったと思いますけど、江戸時代になると商業も盛んになり、それなりに裕福な檀家さんがいるお寺であれば、経蔵くらい建てられたのかもしれません。

5. 日本の図書館建築の歴史

この経蔵は、先ほど申し上げたように図書館の書庫と似ているところがあります。そこで次に図書館の書庫、あるいは図書館の建物全体の、時代による変遷を見てみたいと思います。

5.1 土蔵造

まず、土蔵です。こちらは岡山県備前市の閑谷（しずたに）学校の文庫、庶民のための学校の書庫です（1677年）[xx]。窓１つないのは、やはり防火対策だと思います。この文庫の後ろは火除山といい、山の向こうの学生寮などからの出火に備えたものです。母屋といいますか、講堂からもちょっと離れているのも、やはり防火対策があると思います。そして、紙で出来た本の場合は比較的小型、軽量ですので、必要があれば書庫から本を取り出して母屋で読む、という読書の形でもさほど不自由はありません。これが中国や日本の読書の形です。

5.2 煉瓦造・石造

それが近代になって西洋風の建物が入ってきます。そうするとやはり西洋風の方が優れていると思うわけで、煉瓦造や石造の図書館が現れます。こちら、グーグルのストリートビューでご覧ください[xxi]。東京都内で残っている一番古い煉瓦造の建物で（1880年）、現在の国立国会図書館の前身であり、また現在の国立科学博物館の前身でもあります。今は東京藝術大学のキャンパス内の倉庫です。この奥にはもう１棟同じような煉瓦造の書庫が残ってますが、そちらも国立国会図書館の前身の１つである東京図書館の書庫です（1886年）。駒澤大が現在地にキャンパスを移転して最初に造った書庫は煉瓦造ですが、黒煉瓦と書いてありました。形としてはこのようなものではなかったかと思います。

煉瓦造では他に、慶應義塾の図書館などがあります。これが建設当時の姿ですが（1911年）、ちょっとその後、姿が変わっています[xxii]。なぜかというと、まず関東大震災で相当被害を受けました。さらに第二次世界大戦で焼けましたが、柱が鉄骨だったようで、外観は残りました。それで修復工事をしたのです。次に、立教の図書館、メーザーライブラリー（旧図書館旧館・1918年）です。こちらもストリートビューでご覧ください[xxiii]。実はこの図書館の後ろ側に書庫があり、その書庫が大体駒澤大のこの図書館の書庫と同時期に作られたものでした。しかし戦後、書庫は取り壊され1960年に丹下健三設計の新しい図書館が竣工しました（旧図書館新館）。立教の旧館も関東大震災で大きな被害を受けたようです。

5.3 木造

在来工法である木造の図書館ももちろんあります。こちら北海道大学の前身の札幌農学校の図書館です（1899年）[xxiv]。まずこちらは母屋（読書室）で、木造です。ストリートビューでは映っていませんが、この裏手に書庫があり、そちらは煉瓦造です。昔の図書館には、このように、閲覧室と書庫を別々に作ったものが結構多いんです。その場合、大抵書庫は丈夫な煉瓦造、閲覧室は簡素な木造なんです。利用者よりも、大事なのは本なんです。本を守るためには西洋風の丈夫な煉瓦造の書庫だ、となったのだと思います。

次に三重県の飯南郡図書館です（1912年・写真３飯南郡図書館）。現在は松阪市立歴史民俗資料館になっています。こちらは母屋が木造、書庫が土蔵です。煉瓦造はお金がかかるので、在来工法で書庫を造ったのでしょう。

写真３　飯南郡図書館

5.4 鉄筋コンクリート造

そして鉄筋コンクリートが登場するのですが、日本で最初に鉄筋コンクリート造の図書館が造られたのは函館です[xxv]。まず最初に書庫を作り（1916年・写真４函館図書館書庫）、後年母屋を建てました（1927年）。設計は辰野葛西建

築事務所です。辰野金吾というと、やはり東京駅の煉瓦造が有名ですが、函館は事務所の中にいた若手の設計者が担当したんでしょうね。なんで鉄筋コンクリートなのか、ですけど、大きな決め手としては関東大震災の被害がありますが、函館図書館の書庫はそれ以前なんです。函館は何回も何回も火事があったところで、早くから煉瓦造、そして鉄筋コンクリート造が用いられました。

写真４　函館図書館書庫

日本で初めての鉄筋コンクリート造のお寺も函館の真宗大谷派函館別院（東本願寺函館別院・1915年）と言われてます。ところが、足立区の千住に勝専寺というお寺があります。こちら1906年建立のコンクリート造で、煉瓦が貼ってあります。つまり関東大震災よりずいぶん早い時期から寺院でもコンクリート造が取り入れられていたようです。駒澤大で書庫を建て直すという時に、いち早く鉄筋コンクリートを選択したのは、もしかしたらこうしたお寺での先行事例を参考にしたのかもしれません。

関東大震災では、多くの図書館が被災しています。それを教訓にして、図書館でも鉄筋コンクリート造が増えていきます。北区の青淵文庫は建てている途中に地震にあってしまい、改めて作り直しました（1925年）[xxvi]。ただ外側だけを鉄筋コンクリートにするだけではなくて、書庫内の本棚（書架）もスチール製になっています（CD版『青淵文庫保存修理工事報告書』）。日本で非常に早い時期のスチール製の書架で、この書架も含めて重要文化財に指定されています。現在の日本ファイリングという会社の前身会社の製造です。

震災後、駒澤大の図書館とほぼ同時期に建設された図書館としては、例えば、早稲田大学の図書館があります（現在は高田早苗記念研究図書館・1925年）[xxvii]。閲覧スペースが３階建てですが、書庫スペースは７層です。こういう造り方って大丈夫なの？と思うかもしれませんが、これを設計した内藤多仲（たちゅう）は、後年東京タワーや名古屋タワーなどを設計しています。多分、しっかりとした構造計算をしていて、それが戦後の東京タワーなどの設計に活かされたのでしょう。書庫内の書架は鉄製ですが、棚板は木製です。まだこの時期、塗装技術が日本では充分に発達しておらずペンキも多くは輸入に頼っていた時代なんです。特に本の場合は錆が心配ですので、駒澤大の図書館の書架も、棚は木製だったはずです。

写真５　耕雲館（1928 年）

次に東京帝国大学ですが、関東大震災でご覧の通りの状態になりました[xxviii]。煉瓦造であったため、外側は残っていますが一部壊れたところがあります。恐らくは柱が木骨だったんでしょう、その木の部分、そして窓など火が入ってしまって、多くの資料が

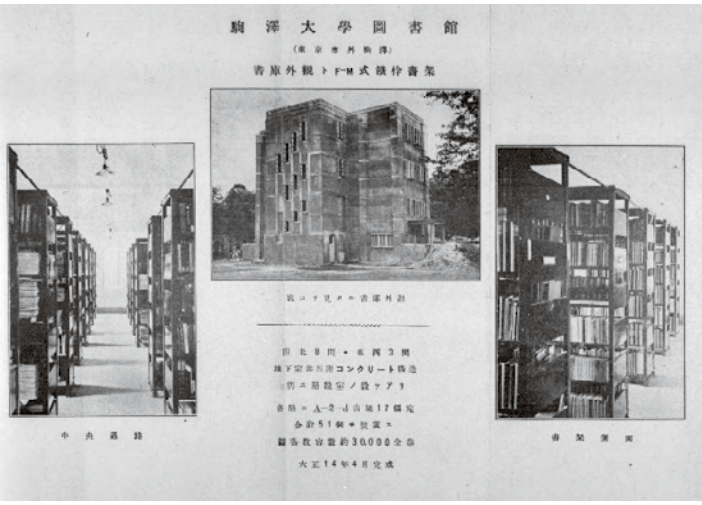

写真６　『図書館研究』第５巻口絵

焼けてしまい、当時の館長が引責辞任しました。これを教訓として鉄筋コンクリートで再建されました（1928年）。書庫内の書架もこれまた鉄製です。まるで戦艦か潜水艦のような、といわれていますがその通りで、三菱造船（現在、三菱重工業）長崎造船所の製造です。第一次世界大戦が終わって軍縮の時代になりましたが、軍艦の製造技術は残さなければいけないので、こういった方面にその技術を援用して、ということになったようです。

そして駒澤大ですが、図書館の日誌には、全壊は免れたけれども、大きな亀裂が生じてしまった。雨が降ってきて、雨が中に入ってきて、資料が水浸しとなってしまい、やむを得ず、閲覧室を臨時の書庫にして本を移したが、閲覧が出来ない状態になってしまった、と書かれています（駒大史ブックレット６「図書館誌」にみる駒大図書館史【その２】）。そこで兎に角早く書庫を新しく建てようということになった。しかしながら、煉瓦造ではダメだと、非常に早い決断で、鉄筋コンクリート造の書庫をまず先に建てたようです。残念ながら現在書庫の部分は残っていませんが、間宮商店という会社の書架で、先ほど申し上げたように棚板は木製です（写真５耕雲館（1928年）・写真６『図書館研究』第５巻口絵）。

６. 書架

さて今、駒澤大などの図書館内の書架について触れましたが、あらためて書架とは、図書類を収納、排列するための家具のことです。書棚、本棚などの言い方もあります。先ほどお話しした輪蔵とは、回転式の経棚になります。

６.１ 回転する本棚

この回転する本棚という仕組みですが、16世紀のヨーロッパでも作られたようです。イタリアのアゴスティーノ・ラメッリ（Agostino Ramelli）が設計し、1588年に出版された『種々の精巧な機械』（Le diverse et artificiose machine del Capitano Agostino Ramelli）で紹介されています（317ページ）[xxix]。

６.２ 経蔵の内部

次に、経蔵ですが、全部が全部回転式の輪蔵ではありません。例えばこちらは中尊寺の経蔵内を撮影した絵葉書ですが[xxx]、唐櫃という箱に入れて並べています（資料番号:pc010653-0004）。次にお話ししますが、輪蔵は大蔵経を閲覧するために考案されました。日本の小ぶりな印刷版大蔵経であれば、大掛かりな輪蔵をわざわざ作る必要はないといえばないのです。こちらは石川県能登町の願成寺の黄檗鉄眼版大般若波羅蜜多経を収納した木製箪笥です[xxxi]。画像を見る限り12竿（６組）で全部収納できたようです。ではなぜ、輪蔵なのでしょうか？

６.３ 輪蔵

輪蔵は、中国・南北朝時代の傅大士（ふたいし）（翕）という人物が大蔵経を閲覧する便をはかって創設したと言われています。輪蔵を１回転させることで、大蔵経を読誦するのと同じ功徳を積むことができるとされます。中国では禅宗が興隆した宋時代に盛んに建立されました。

日本で現存最古の傅大士像は、京都市・大報恩寺蔵（北野経王堂輪蔵旧安置・1418年）の木像です。室町時代の木像が残っているということは、室町時代には輪蔵もある程度定着した、ということになると思います。

こちらは長野市・善光寺の経蔵（1759年）とその入口の傅大士像です[xxxii]。息子２人（普建・普成）が両脇にいます。それから経蔵の手前左右に輪廻塔があります。経蔵の内部は輪蔵ですね。善光寺の輪蔵は大型で重さは約５tあります。拝観すると輪蔵を回させてくれますが、大変に重たく、１人ではなかなか動かせません。これはやはり、信徒の方が集まってぐるっと回す、のが通常と思います。

回転するということでは、マニ車があります（先の善光寺の輪廻塔）。もっと大規模に回すということになると、例えば群馬県渋川市の水沢観音（水澤寺）の六角堂は、堂内の地蔵尊を左に３回転させます[xxxiii]。それから、数珠回しというのもあります。長さ数mの大きな数珠を、皆が輪になり、念仏を唱えながら繰り送ります。回すということは、輪廻ですね。皆で力を合わせて回すことで供養し、功徳を得るのです。

この輪蔵ですが、中国・宋時代の契嵩は次のように言っています（「無為軍崇寿禅院転輪大蔵記」『鐔津集』巻14）。

内置仏像･法器、金碧照耀、皆儼然可観。其用銭凡七百万。夫転輪蔵者、非仏之制度、乃行乎梁之異人傅翕大士者、

実取乎転法輪之義耳。

栄西のみた「荘厳なること浄土の如き」経蔵とは、このようなものだったのでしょうか？それにしても、建設には多額の費用がかかるものであったようです。契嵩はこれを「仏の制度にあらず」としていて、なかには眉をひそめる向きもあったようです。

7.「ばえる」本／図書館

同じく宋時代の孫覿は、崇安寺というお寺の経蔵の煌びやかな様を次のように言っています（「崇安寺五輪蔵記」『鴻慶居士集』巻23）。

> 鳩材数千張、斂銭数十万、営業一大蔵殿。殿成以黄金・丹沙・瑠璃・真珠・旃檀・衆香、創宝輪蔵。浮空湧地、間見層出、若化成然龍天擁衛、鬼神環繞、光明晃耀、如百千日。（中略）両輪互転、如聴海潮音。

あまり僕は漢文は読めないんですけれども、漢字の字面だけ見ても非常に美しいものであったことがうかがえます。宗教上はこうした「ばえ」も人集め、金集めのために必要だったようです。

7.1 仏典

「ばえ」ということですと、まずお経の世界ですが、ただ文字だけではなくて美しく装飾した美しいお経、装飾経があります。例えばこちらは奈良国立博物館所蔵の『大般若経』です[xxxiv]。平安時代後期（12世紀前期）に書写された中尊寺経です。紺色に染めた紙に銀泥で界線を引き、金銀泥で経文を書写しています。

こうした「ばえる」経典は、仏教だけではなく、他の宗教にも見ることができます。

7.2 コーラン（クルアーン）

例えば、こちらは大英図書館所蔵の14世紀のコーラン（クルアーン）です[xxxv]。このクルアーンは、マムルーク朝時代のカイロで作られたもので、スルタン・バイバルス（Sultan Baybars）のクルアーンとして知られています。

7.3 聖書

キリスト教の世界でも、絵入りの聖書などが多数作られています。こちらはスコットランド国立図書館がデジタル化した15世紀の写本の１つです[xxxvi]。こちらの本には、写本を作っている修行僧が描かれています（22コマ目）。

7.4 図書館

そして「ばえる」建物もあるんです。最近世界各地の美しい図書館を紹介した本が何冊も出ています。その中でだいたい共通して取り上げられているのが、ヨーロッパの古い修道院図書館です。

例えばこちらは、スイスのザンクト・ガレン修道院図書館（Abbey Library of Saint Gall・1767年）です。こちらもストリートビューでご覧ください[xxxvii]。非常に高い天井で、上にフレスコ画が描かれています。この建物（耕雲館）のステンドグラスのある吹き抜けの大閲覧室の空間構成は、あるいは、古い修道院図書館なんかをちょっと頭に思い浮かべて設計されたのかもしれません。およそ図書館的じゃないように正直思うんですけれども、ただこういった修道院図書館などを見ると、確かに「ばえ」ますね。

日本でももちろん「ばえる」建物があります。こちらは1621年建立の京都の知恩院の経蔵ですが、その内部の天井や柱、壁面は狩野派の絵師の手によって荘厳されています[xxxviii]。あるいは栄西をはじめとした日本の僧侶が中国で見た経蔵とは、こんな美しくおごそかに飾られたものだったのでしょうか。先ほど、この耕雲館が古い修道院図書館に発想を得たかも、と言いましたが、もしかすると、こうした浄土のごとき経蔵から考えついたのかもしれません。

だいぶ時間を超過してしまい、後半駆け足になってしまいました。これで話を終わります。有難うございました。

本稿は、令和４年10月22日（土）に開催した第41回禅博セミナー「大学図書館の歴史と建築」歴史編(https://youtube.com/live/vrQLgWJO4BU）の講演録である。本稿作成に際しては、高野弥生（禅文化歴史博物館契約スタッフ、

駒澤大学大学院人文科学研究科 歴史学専攻博士後期課程１年）が文字起こしを担当し、講演者である小黒浩司氏に整文、校正等を依頼した。ただし、本稿の表現等に関する責任は、駒澤大学禅文化歴史博物館が負うものとする。

註

i　国立民族学博物館所藏 中西コレクション「パーリ語の仏教経典」（http://www.aa.tufs.ac.jp/i-moji/tenji/syousai/B08.html）

ii　同「マンヤン文字刻印の竹製容器」（http://www.aa.tufs.ac.jp/i-moji/tenji/syousai/B03.html）

iii　同「タイの彩色仏教経典」（http://www.aa.tufs.ac.jp/i-moji/tenji/syousai/B04.html）

iv　同「エチオピアの聖書」（http://www.aa.tufs.ac.jp/i-moji/tenji/syousai/B13.html）

v　国立国会図書館 電子展示「インキュナブラ「インキュナブラ小辞典」」（https://www.ndl.go.jp/incunabula/glossary/index.html#glo_16）

vi　大英図書館所蔵　Or.2165（https://blogs.bl.uk/asian-and-african/2016/04/the-british-librarys-oldest-quran-manuscript-now-online.html）

vii　奈良国立博物館 収蔵品データベース「筑前国嶋郡川辺里戸籍断簡」（https://www.narahaku.go.jp/collection/d-871-0-1.html）

viii　国立国会図書館 電子展示「描かれた動物・植物 江戸時代の博物誌」（https://www.ndl.go.jp/nature/column/column_1.html）

ix　慶応義塾大学三田メディアセンター所蔵 ヘブル語聖書トーラー写本（https://www.lib.keio.ac.jp/collection/rarebooks_mita/torah.html）

x　曹洞宗出版物販売サイト（https://shop.sotozen-net.or.jp/products/list.php?category_id=10）

xi　ラウレンツィアーナ図書館のデジタルライブラリー（https://tecabml.contentdm.oclc.org/digital/collection/amiatino/id/7/rec/1）

xii　曹洞宗のウェブサイト（SOTOZEN-NET）「曹洞宗とは―経典」（https://www.sotozen-net.or.jp/）

xiii　駒澤大学電子貴重書庫「無垢浄光經自心印陀羅尼」（http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/collections/MD40140695/?lang=0&mode=0&opkey=R165329377347191&idx=1&codeno=&fc_val=#?c=0&m=0&s=0&cv=0&r=0&xywh=-569%2C277%2C11186%2C6435）

xiv　大英図書館のウェブサイト“Printing landmarks”（https://www.bl.uk/british-library-treasures/articles/printing-landmarks）

xv　駒澤大学電子貴重書庫「大般若波羅蜜多經」（http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/collections/MD40140782/?lang=0&mode=0&opkey=R165329579278196&idx=1&codeno=&fc_val=#?c=0&m=0&s=0&cv=0&r=0&xywh=-1507%2C-461%2C6386%2C3674）

xvi　唐招提寺のウェブサイト「伽藍と名宝」（https://toshodaiji.jp/about_kyouzoh.html）

xvii　海竜王寺のウェブサイト「境内散策」（https://kairyuouji.jp/precincts-walk/）

xviii　三井寺のウェブサイト「三井寺文化ミュージアム――切経蔵」（https://miidera-museum.jp/cultural-property/contents/7/）

xix　徳興山建中寺のウェブサイト「建造物」（http://www.kenchuji.com/kenzo.html）

xx　特別史跡旧閑谷学校のウェブサイト「史跡各所案内」（http://shizutani.jp/ja-map/）

xxi　グーグル・ストリートビュー（https://www.google.com/maps/@35.7195318,139.7723006,3a,75y,291.68h,92.69t/data=!3m7!1e1!3m5!1sA9-TTqDLRD0EJGtRf29YJA!2e0!6shttps:%2F%2Fstreetviewpixels-pa.googleapis.com%2Fv1%2Fthumbnail%3Fpanoid%3DA9-TTqDLRD0EJGtRf29YJA%26cb_client%3Dmaps_sv.tactile.gps%26w%3D203%26h%3D100%26yaw%3D45.976734%26pitch%3D0%26thumbfov%3D100!7i13312!8i6656?entry=ttu）

xxii　慶応義塾のウェブサイト「慶應義塾のシンボル・図書館旧館」（https://www.keio.ac.jp/ja/keio-times/features/2019/12/）

xxiii　グーグル・ストリートビュー（https://www.google.com/maps/@35.7307545,139.7042291,3a,75y,59.92h,100.18t/data=!3m7!1e1!3m5!1sYCiJQONYL63i2zLzLhAamA!2e0!6shttps:%2F%2Fstreetviewpixels-pa.googleapis.com%2Fv1%2Fthumbnail%3Fpanoid%3DYCiJQONYL63i2zLzLhAamA%26cb_client%3Dmaps_sv.tactile.gps%26w%3D203%26h%3D100%26yaw%3D156.69853%26pitch%3D0%26thumbfov%3D100!7i13312!8i6656?entry=ttu）

xxiv　グーグル・ストリートビュー（https://www.google.com/maps/@43.0706948,141.3417059,3a,75y,18.75h,97.9t/data=!3m6!1e1!3m4!1sgbQdQjTNQ9aVj4l9Hbt1Yw!2e0!7i13312!8i6656）

xxv　グーグル・ストリートビュー（https://www.google.com/maps/@41.7557681,140.7152647,3a,75y,168.61h,87.35t/data=!3m7!1e1!3m5!1sAF1QipNloWB8mDO2rLyCeBhIHmPvBAVxGwlO-x1wdl25!2e10!3e11!7i5376!8i2688?entry=ttu）ちなみに、この函館図書館は函館公園の中にあります。もしかして今日こちらにお越しの方、YouTubeでご覧の方で、博物館関係の方がおられると思うんですけれども、この函館の博物館も非常に古いもので、現存最古の博物館建築と言われています。

xxvi　グーグル・ストリートビュー（https://www.google.com/maps/@35.7490947,139.7399047,2a,58.6y,305.85h,99.84t/data=!3m6!1e1!3m4!1sZrFWiuHT9XLJkY9bpR2jqg!2e0!7i13312!8i6656?entry=ttu）

xxvii　グーグル・ストリートビュー（https://www.google.com/maps/@35.7088475,139.7200251,3a,75y,129.34h,105.27t/data=!3m6!1e1!3m4!1sYU1GNImO3H86SesDLMQ-GA!2e0!7i13312!8i6656?authuser=0&entry=ttu）

xxviii　中央区立京橋図書館所蔵「帝国大学図書館の焼跡」（https://www.library.city.chuo.tokyo.jp/bookdetail?12&retresult=page%3DDETAIL%26area%3D2%26comp5%3D3%26cond%3D1%26item5%3DGH%26key5%3D%25E9%2596%25A2%25E6%259D%25B1%25E5%25A4%25A7%25E9%259C%2587%25E7%2581%25BD%26mv%3D20%26pcnt%3D7%26sort%3D1%26target1%3D1%26&num=1701143&ctg=1&area=2&areaimage=1）

xxix　フランス国立図書館 Gallica（https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k15110941.image）
xxx　函館市中央図書館デジタル資料館「絵葉書」（https://archives.c.fun.ac.jp/postcards）
xxxi　文化財オンライン「願成寺の黄檗鉄眼版大般若波羅蜜多経および収納木製箪笥」（https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/408925）
xxxii　善光寺のウェブサイト「主要施設」（https://www.zenkoji.jp/about/syuyou/）
xxxiii　五徳山水澤観世音のウェブサイト「境内のご案内」（https://mizusawakannon.or.jp/precincts）
xxxiv　奈良国立博物館 収蔵品データベース（https://www.narahaku.go.jp/collection/1201-0.html）
xxxv　大英図書館所蔵 Add MS 22406（https://blogs.bl.uk/asian-and-african/2018/05/over-2000-pages-in-gold-sultan-baybars-quran-now-online.html）
xxxvi　スコットランド国立図書館（https://digital.nls.uk/early-manuscripts/browse/archive/219603956#?c=0&m=0&s=0&cv=21&xywh=0%2C-1955%2C7849%2C9529）
xxxvii　グーグル・ストリートビュー（https://www.google.co.jp/maps/@47.4227969,9.3764388,2a,75y,285h,118.53t/data=!3m7!1e1!3m5!1sf4wVQioR8nKqiAuMezY4PQ!2e0!6shttps:%2F%2Fstreetviewpixels-pa.googleapis.com%2Fv1%2Fthumbnail%3Fpanoid%3Df4wVQioR8nKqiAuMezY4PQ%26cb_client%3Dmaps_sv.tactile.gps%26w%3D203%26h%3D100%26yaw%3D239.9414%26pitch%3D0%26thumbfov%3D100!7i13312!8i6656）
xxxviii　知恩院のウェブサイト「知恩院の建造物」（https://www.chion-in.or.jp/highlight/building/kyozo.php）

（おぐろ　こうじ　作新学院大学人間文化学部教授〈講演当時〉）